



## 〈サッチャーの置き土産〉

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

『女性の輝く社会』が現政権の女性向けスローガンになっている。有名なイギリス元首相サッチャーさんは、そうした目標の一人なのだろうか。一九八〇年代、英国病と言われた経済不況に大ナタを振る強い英国を取り戻した『鉄の女』の一方、サッチャーほど映画のネタを振りまいた首相もいない。そのナタでなぎ倒された側から実感こもる優れた人間ドラマが生まれたのは皮肉この上ない。特に、炭坑労働者たちの家族ぐるみの闘いの中から、「リトル・ダンサー」「プラス」「フル・モンティ」など、自らも家長制的価値観を引きずりながらも、家族愛、友情、男気、ユーモア、正義感など人間味あふれる名作が生まれた。本作もその流れの中の一つ。これも実話に基づく。

労働者らのストライキに心を動かされる。「彼らの敵は(同性愛者嫌いの)サッチャーと警察。つまり俺たちと同じだ」と気づいたマークは、当日行われたゲイ・パレードで行進しながら募金を呼びかける。そして集まった金を全国炭坑労働組合に送ろうと、「L G S M(炭鉱夫支援レズ&ゲイ会)」の結成を仲間呼びかける。集まったのはわずか九人だったが、募金を送ろうと「レズ&ゲイ会」を名乗ると組合側から電話を切られてしまう。大都会ロンドンですら「ヘンター」呼ばわりされる彼らは、組合にとつてはとても相手にできる人種ではなかった。組合ではなく直接炭坑に電話をしてみると、ウェールズの炭坑町が彼らを受け入れるという。数日後、炭坑の代表タイがロンドンまでやって来る。「L G S M」のLをロンドンと勘違いしていたことがわかるが、偏見のないタイは、その夜、生まれて始めてゲイ・バーに案

内され、ステージから「皆さんが我々にくれたのは単なる金ではなく友情です」と語りかける。感動的なスピーチのおかげでL G S M入会者がぐんと増え、多額の寄付金を送ることができた。

炭坑町側では感謝のパーティーにL G S Mを招待する。だが、はるばる小型バスでロンドンからやって来た派手な衣装のメンバーを見て、主催者以外の町の人々は白い眼を向ける。ただ好奇心は旺盛で、翌日には素朴な質問攻めにしたるうちに、ゲイと住民の間には和やかな空気が。中には「実は…」とカムアウトする町民も。

山あり谷ありしながら互いの誤解を解いて、ヤマの男たちとゲイたちが手をつなぐとする姿がユーモアを交えて丁寧に描かれる。その一方、国と労働組合の交渉は決裂、ストは四二週目に入り、サッチャー政権は組合員の家族手当の支給を停止。労働者らはさらに厳しい状況に追い込まれる。一層の支援を決意するL G S Mだったが、密告で新聞に「オカマがストに口出し」と書かれ、資金集めのコンサート企画にも思わぬ難問が…。それでもめげないヤマの男たちとゲイの連帯。思いもかけない歴史の皮肉は、もしかしてサッチャリズムの置き土産だったのかもしれない。



## 『パレードへようこそ』

イギリス映画 (121分)

監督：マシュー・ウォーチャス  
出演：ビル・ナイ、イメルダ・スタウトン、アンドリュー・スコット、ジョージ・マッケイ、パディ・コンシダイン、ベン・シュネツァー他

4月4日 シネスイッチ銀座ほか全国順次公開

© PATHE PRODUCTIONS LIMITED, BRITISH BROADCASTING CORPORATION AND THE BRITISH FILM INSTITUTE 2014. ALL RIGHTS RESERVED.